

# 玉川奈々福

## 泣きもあれば笑いもある、 感情に訴えるのが浪曲

20年前、三味線の音色に惹かれて浪曲の世界に足を踏み入れた。「浪曲の三味線は音の出し方が自在。効果音や“うっ”という人の感情なんかも描けます。いくら弾いても飽きません」。軽い気持ちではじめたが、音色の先にある浪曲の核心がなかなか掴めなかった。師匠に促され、節をうなったことでさらに深みにはまった。「節をうなって、はじめて芸の自在さを感じました。浪曲師と曲師の裁量がすごく大きい。だからセッションがうまくいったときの快感は<sup>たと</sup>えようありません」。

近年では他ジャンルとのコラボレーションも多い。「例えば格式の違いお能でも、身体と身体で息が合う共通性に気づいて、お能の語りの間に三味線を入れられた。譜面がなくて人の息を盗む浪曲の三味線ならでは」。芸能の特徴を探ることで世界が広がっている。

浪曲といえば浪花節。浪花節は

お涙頂戴の代名詞だが、笑える話も多いという。「昔は寄席でも浪曲が入っていて、その多くが粋な笑いでした。いまあまり知られていないのは残念。泣きもあれば笑いもある。感情に訴える浪曲は、その振り幅が大きい。『次郎長伝』や『左甚五郎伝』などネタそのものが笑えるものがいっぱいある」。

笑いが好きだった師匠から受け継いだ演題の他に、新作にも取り組む。「自分がいいなと思う価値観を込めたい。原作に惚れ込んで浪曲にしたり、お涙頂戴の先入観を覆したいと『浪曲シンデレラ』という爆笑の作品をつくったり。緊張を強いられる世の中だから、客席で物語に心浸しているときだけは、油断してほしい。身体緩めてほめてほしい」。

舞台は生き物。お客様とつくる空間を毎回楽しみに、舞台やワークショップなど、独自の企画が生まれている。

# TAMAGAWA NANAFUKU



PROFILE 1994年日本浪曲協会主宰の浪曲三味線教室に参加。翌年玉川福太郎門下に曲師として入門。2001年より浪曲師としても修行を重ね、浪曲師と曲師の両方で活動。2006年に芸名を玉川奈々福に改める。浪曲イベントのプロデュース・出演に加え、テレビ、インターネットラジオなどで幅広く浪曲の魅力を伝えている。